

出会い (8)

カルメルへの道

奥村 一郎

1. 偶然から偶然へと・・・

戦時中の学徒出陣、それから、終戦後まもなくの復学までは、敗戦の悲惨から立ちあがろうとしていた日本社会と痛ましい運命を共にするしかなかったが、東大復学を契機として、突然、全く予期しなかった偶然の出来事から、また次の偶然の出会いへとふりまわされる日々が続いた。

カトリックの受洗は、前記のように、1948年12月12日であったが、その翌々日、14日（火曜）は、宗教学科でのレポートを発表することになっていた。初めに考えていた論文の主旨は、例の粗暴な反キリスト論と、カトリック神学批判のつもりでいたが、全く思わぬ道の紆余曲折、果てには受洗にまで至ったため、その論文を公表することができなくなってしまった。かといって、それと全く逆の論文を用意する時間も心の余裕もない。ハタと困ってしまった。そこで、岸本主任教授の了承を得て、以前のままの論文を公表することにした。発表の折には、まず、次のような弁解を添えるしかなかった。「これから発表させていただく論文は、現在のわたしの考えではなく、今になっては、嘔吐のように吐き捨てたいものです。そのつもりでお聞きいただけましたら幸いです」と前置きしながら、約一時間にわたる研究発表を終えた。

「奥村君、君のようなカトリックがいるとは驚いたネ。これから大丈夫かな？」と、心配げに、いつもの温顔をみせながら、ひとこと言われた、今はなき、岸本先生が懐かしく思いだされる。

2. 十字架の聖ヨハネ — 『Dark Night (暗夜)』

さて、ひとつの峠を越えたと思っていたら、またすぐに、学期末のもうひとつの課題が迫っていた。「東西神秘主義」というテーマでの岸本先生の講義に関連する小論文の提出ということだった。

それまでは、主に、禅思想を中心とした東洋神秘主義にのみ関心をもってきたので、カトリックの受洗直後ということもあり、西欧のキリスト教神秘主義をとりあげたいと思った。ところが、まだ、その方面での知識が乏しく、その上、提出期限が迫ってきたため、途方にくれて

いた。そうこうするうちに、思わぬところで助け舟に出会った。

ある日、東大赤門から出て帰宅の折、中央線御茶ノ水駅近くの交差点で、友人Sにバッタリ会った。彼は哲学科の学生だったが、カトリックの幼児洗礼を受けており、教会のことに詳しくあった。早速、例の論文テーマに困惑していることを話すと、「十字架の聖ヨハネ」という十六世紀スペインの神秘家を奨めてくれた。しかし、わたしには全く初耳、その著書や参考資料もない。そこで、「カルメル会という修道会の聖人だから、上石神井にある女子カルメル会修道院にいけばいいよ。すぐに、本など貸してくれるよ・・・」という彼の話に乗り、早速、その足で女子カルメル会修道院を訪ねた。現在は、イエズス会の黙想の家として使用されているが、外堀や大門などは、今もその頃の趣を残している懐かしい処。シスターは、すぐに聖ヨハネのいくつかの著書をもってこられた。いずれも英訳か仏訳。邦訳はなかった。藁をもつかむ思いで、とにかく一冊厚めの本を借りてきた。聖ヨハネの代表作のひとつ、『カルメル山登攀』だった。本の冒頭には「Dark Night (暗夜)」という、八節からなる詩が載せられていた。それに続く章は、その詩にもとづく解説の形で神秘的な霊性体験が綿密に示されたかなり部厚い本であった。英文では、日本語のように早く読めず、消化もむづかしい。それに、提出期限も間近。ここでもまた行き詰まった。以前の東大法学部卒の卒業試験の折のような頓知もすぐには出てこない。ここで思いついたのが、次の方法。

著者、聖ヨハネにならい、その「暗夜」という詩について全く我流の解説をすることにした。今思えば、汗顔の至りだが、背に腹はかえられない。とにかく、レポートはさいわい合格。神に感謝。

ところで、借りた本は、また、女子カルメル会修道院に返しに行かねばならない。それがまた縁となって、やがてわたしの未来を方向づけるカルメルへの兆しが見えはじめてきていた。

というのも、十字架の聖ヨハネの神秘的霊性は、長い間親しんできた禅の霊性、とくに、道元禅師の教えと余りにも近いと知ったことが、カルメル会への関心を急速に深めることになった。とくに、聖ヨハネの小品集、「霊的勧告集」は、



奥村 一郎 / おくむら いちろう
1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりパチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンズ宗教研究所）など多数。

その頃から座右の書となった。

3. 幼いイエスの聖テレジア — 『小さき花 (自叙伝)』

今では、中部地区の代表的カトリック大学となっている名古屋の南山大学の体育館をかりて、神言会司祭、故ゲマインダ師の指導による青年黙想があり、それに参加したのは、受洗後まだ一年にならぬ、昭和24年（1949）の夏8月10日頃のことであった。四日ほどの短い期間であったが、なにしろ受洗後はじめての青年黙想会。退屈だったことだけを記憶している。ガランとした体育館の隅の方に、八つほど、藁のマットスが無造作に並べられ、そこで、皆いっしょにゴロ寝をしていた。傍らには、数冊の黙想用の本が机の上におかれていた。

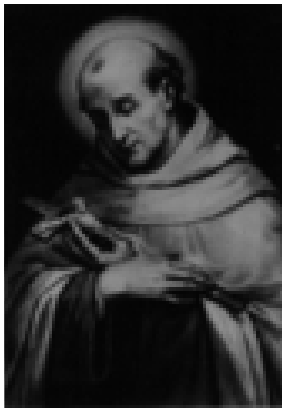
二日目ぐらいだったろうか。退屈しのぎに、なんの気なしに手にとったのが、幼いイエスの聖テレジア自叙伝、「小さき花」であった。

気楽に読み進むうちに体ごと吸いこまれるほど、その本に魅了され、一挙に読み通した。本をとじて机に返したときには、まるで、的を目指して一直線に飛びたつ矢のように、私の魂の視線は、はっきりとカルメルに向かっていった。

マッチにたとえれば、マッチの軸にあたる木の部分が十字架の聖ヨハネ、火がつくマッチの頭の部分が、小さいテレジアであった。

4. 難関

名古屋での黙想を終えてすぐ、故郷の岐阜に両親を訪ねた。二回目の大学卒業も間もない頃になっていたで、その後の方針について話し合わなくてはならなかった。結婚の話もすでにいくつかあった。受洗後、下山正義師にすすめられ、神父になる道について話したこともあったが、父は全く相手にしないどころか、激怒した。



十字架の聖ヨハネ (1542-1591)
スペインの神秘家



幼いイエスの聖テレジア (1873-1897)
フランスの聖女。昨年「教会博士」の称号をうける。

今度は、さらに受けいれられそうもない話。遠い異国のフランスに行って、カルメル会という、およそ耳にしたこともないような修道院入会ということになると、両親は、一体、どのように受けとめてくれるだろうか、全く予想できなかった。それに、わたし自身全く未知な世界であるだけに、質問されても答えようがない。

しかも、戦後まもなくの貧困のなかで、二度までも大学に学ぶことをゆるしてくれた両親、また、若い頃姉を失ったわたしは、両親の生活のことも考えねばならない一人息子の身でもあった。

家に着くと、すぐ父が迎えに出てくれた。いっしょに廊下の椅子に腰をおろす間もなく、「お前、将来はどうするつもりか?」と、とり急ぐようにきかれた。「カルメル会という修道会に入りたい。そのためには、まだ日本に男子カルメル会がないため、フランスにまで行かなくてはならない」と、簡潔に答えるわたしの方を見て、しばらくだまったまま、目を伏せた父の姿は今も忘れられない。再び、強く拒絶されるかと思っていただけに、そのときの一瞬の沈黙は深く重かった。やがて落ち着いた様子で父は口を開き、

「お前がよく考えて決めたことだと思うから、おれは反対しない」と、ゆっくり答えてくれた。

急に、大きな肩の荷がおりたように互いに顔を見合わせた。すると、父はさらにひとことつけ添えた。

「だが、始めたことは必ずやり通すことだ」

この一語がどれほどの意味をもつかは、その後のカルメルにおける五十年近い修道生活での多くのことが物語ってくれた。自ら恥じいることばかりの自分をふりかえるとともに、あのときの尊い父の励ましと、十年前に他界した父のあとを追うかのように帰天した母のいつもあたたく静かな沈黙の眼ざしを今も思う。

表紙の写真

ロバート・バイヤース作品



Face Rock, Bandon, Oregon, 1986

Robert Byers

1918年生まれ。カリフォルニア州カーメルで弁護士業を営むかたわら、1960年代からアンセル・アダマス、ウィン・パロック、ブレット・ウェストンと親交をもち、撮影を共にする。1969年よりフレンズ・オブ・フォトグラフィーの会計を務め、現在制作活動が続けるかたわら、ワークショップを通じて写真の普及に努めている。

写真展のご案内

フォト・ギャラリー・インターナショナルでは
下記の日程で展示を行います。

虎ノ門

1998年11月25日(水)～1999年1月29日(金)
12月26日(土)～1月6日(水) 冬期休館

今道子 作品展 「Photographs 1998」
Michiko Kon

2月2日(火)～2月26日(金)
松沢毅 作品展 「回歸 Regression」
Takeshi Matsuzawa

3月2日(火)～3月31日(水)
堀越裕美 作品展
「海のはじまりーそしてまたインドの海へー」
Hiromi Horikoshi

P.G.I. 芝浦

1999年1月11日(月)～2月10日(水)
三好耕三 作品展 「In The Road」出版記念展
Kozo Miyoshi

2月16日(火)～3月17日(水)
金榮敏 作品展 「都市の詩」
Young Min KIM

3月19日(金)～4月28日(水)
吉田友彦 作品展 「砂山の砂」
Tomohiko Yoshida



松沢毅「回歸」より

フォト・ギャラリー・インターナショナル(虎ノ門)
月-金 11:00-19:00 土・日・祝 休館
Telephone 03 3501 9123

P.G.I. 芝浦
月-土 11:00-18:00 第2・4土・日・祝 休館
Telephone 03 3455 7827